

博士（農学） 宋 春 浩

学位論文題名

韓国における米穀政策と流通構造に関する研究

学位論文内容の要旨

韓国における米穀政策と流通構造は、1980年代半ば以降における米穀の供給不足から過剰傾向への転換にともなって、大きく変化しつつある。こうした米穀政策と流通構造の変化について、これまで現象的には指摘されてきているが、歴史的な視角から問題を捉え、さらに現段階の実態に踏み込んで問題の解明と今後の政策課題を提示した研究は、未だ韓国の内外においてなされていない。本論文は、以上の学界の現状に照らし、韓国における米穀政策と流通構造の特質を歴史的・現状分析的に明らかにすることによって、今後の政策展開の方向に示唆を与えることを目的としている。

序章で本論文の課題が提起されているが、それは、韓国における米穀政策と流通構造の変遷過程の分析を通じて、米穀市場・流通の構造変化の現段階的特質を明らかにし、その改善課題を提示する、というものである。

この課題設定を受け、第1章では、統計および各種資料分析によって、韓国における米穀の地位を国民総生産、農家経済、都市家計、食生活、一般物価などと関連させて解明し、最後に米の需給現況を明らかにしている。

第2章では、米穀政策の変遷過程を各種資料分析によって、植民地体制期、絶対的不足期、生産急増期、自給達成期、供給過剰期に分け、各時期の特徴を当時の社会経済環境と関わらせながら明らかにした上で、米穀など主要穀物を対象とした現行の糧穀管理制度の仕組みを解明している。韓国における米穀政策は、日本の食糧管理法に相当する「糧穀管理制度」が1950年に制定・公布されたのち現在に至るまで、政府による部分統制、すなわち一部自由市場取引、一部政府統制という二元的体系になっている。また、このような米穀政策は、その後40年の間に、米穀の需給情勢、物価の一般的な趨勢、農業および経済情勢の変化に対応して、幾度か修正され、運用方針も変化してきた。とくに、1962年以降、1980年代の半ばまでは、慢性的な食糧不足からの脱皮を目指し、政府買入量増大と政府買入価格決定方法の改革、農家所得向上と消費者米価安定のための二重価格制の実施など、大きな変化が生じたことを明らかにしている。

第3章では、上記の米穀政策の変遷過程の特徴と関連させつつ、米流通構造の変化を、

韓国における流通の主体である商人、農協、政府の各組織における流通対応に焦点を当てながら解説している。商人組織の場合、米産地の地域条件によって流通構造は異なっているが、米の産地流通において一番重要な役割を果たしているのは搗精業者である。彼らは近年、従来の搗精機能に加えて、米穀の販売、斡旋、金融、保管などの諸機能も担当するようになってきているが、これは政府による米穀買入量の増大に伴って、搗精業を経営的に維持するに足りる粉の確保が難しくなってきており、これに対する同業者の経営対応として、前記の諸機能まで活動領域を広げる必要が出てきたためである。また、商人を通じた流通では、良質米として有名な京畿米に比べて、比較的市場評価の低い湖南米（全羅道の産米）の流通過程が複雑になっているが、これは格上げ米、ニセ・ブランド米など不正取引の介在を示唆している。次に、農協組織を通じる米は、大きくは三つの形態に分類される。一つは、農協組織が原則として自主的に集荷・販売する系統米の販売事業であり、これには委託販売と買取販売がある。二つは、政府買入粉の売出事業によって農協が入札した粉を、農協系統組織を通じて販売することである。三つは、農協が一定量の米を買上げたあと、政府の指定する価格で市中に放出し、農協に損失が生じた際には、政府がこれを補填するものである。最後に、政府組織による米流通構造の中で中軸を占めている放出体系は、1964年以前には配給制であったが、1964～87年までは農協組織を通じての放出体系に変わり、さらに1988～91年には農協および糧穀商支部を経由する二元的放出体系に、1992年以後は糧穀商支部を通じる一元的放出体系へと時期を追って変化してきている。

第4章では、現段階における流通構造の実態と問題点を、産地市場、卸売市場、小売市場の流通段階別の事例分析を通じて明らかにした。産地市場の段階については、米の主産地である京畿地方と湖南地方の実態を、卸売市場の段階については、韓国唯一の法定糧穀卸売市場である良才洞糧穀卸売市場の実態を、さらに小売市場段階では米小売商と大手スーパー・マーケットとの競争の実態を調査分析した。近年における米流通構造の変化において注目すべき点は、産地市場および消費地市場の双方において農協米のシェアが高まっていること、および産地市場において従前大きな役割を果たしてきた賃搗精工場の規模が一般に零細で、農協精米工場との競争の中で厳しい状況にあることである。また、良才洞糧穀卸売市場は、指定卸売人の集荷機能、仲買人および売買参加人の分散機能が発揮されていないなど、大きな問題を抱えているにもかかわらず、そこで形成された価格が産地および消費地における価格形成に少なからぬ影響を与えていた事実を明らかにした。

第5章では、韓国における米穀政策の当面する課題として、①近年、減少率が高まりつつある稻作付面積の維持・拡大方策の樹立、②政府買入期間の延長と時期別買入価格差の導入、および政府放出価格における季節変動幅の導入、③糧穀卸売市場における現物セリ取引の廃止と予約取引または見本取引の導入、④合理的な等級設定・規格化と精米表示制度の導入、⑤糧穀管理基金制度の充実、の5点を挙げ、それぞれの理由を述べた。

終章では、これまでの各章の要約を行い、さらに現段階の韓国における米穀政策と流通

構造の問題点と課題をあらためて整理した。第一に産地流通においては、1980年代半ばまで大きな機能を果たしてきた産地の初収集商のそれが、政府による米価変動防止策の展開、農家の輸送手段の改善などを背景に弱化してきた。他方で、産地卸売商を兼ねる賃搗精業者が産地流通の中では中枢的役割を果たすようになってきている。第二に韓国唯一の糧穀卸売市場である良才洞卸売市場においては、そこへの搬入量が少ないだけでなく、低品質米の搬入が中心で、良質米に対する価格形成機能はほとんど発揮されていない。にもかかわらず、韓国には同市場以外に建値市場になるところがないところに大きな問題点がある。第三に小売市場においては、消費者の良質米志向が高まっているにもかかわらず、これに対応した米穀の規格化や精米表示制度が確立していないため、格上げ米やニセ・ブランド米の横行を許している。第四に政府買入米に適切な品質価格差をつけていないことから、低品質米が政府に集中する一方で、買入価格をはるかに下回る価格での政府米の放出によって、自由市場米価格の低位形成がなされていることである。後者の点は、とくに生産者に大きな不利益を与えている。第五に稻作付面積の減少が進み、このまま推移するならば国内消費に不足をきたす事態が予想されることである。そのため、農業振興地域を中心に農業基盤投資を積極的に図る必要がある。

学位論文審査の要旨

主査 教授 三島徳三
副査 教授 太田原高昭
副査 教授 出村克彦
副査 助教授 飯澤理一郎

学位論文題名

韓国における米穀政策と流通構造に関する研究

本論文は、序章、終章を含め7章からなる総頁数175ページの和文論文である。図19、表38、参考文献170編を含み、他に参考論文5編が添えられている。

韓国における米穀政策と米流通構造は、1980年代半ば以降における米の供給不足から過剰傾向への転換にともなって、大きく変化しつつある。こうした米穀政策と流通構造の変化について、これまで現象的には指摘されているが、歴史的な視角から問題を捉え、さらに現段階の実態に踏み込んで問題の解明を行った研究は、未だ韓国の内外においてなされていない。本論文は、以上の学界の現状に照らし、韓国における米穀政策と米流通構造の特質を歴史的・現状分析的に明らかにすることによって、今後の米穀政策の課題を提示することを目的としている。

この課題設定を受け、第1章では、統計および各種資料分析によって、韓国における米の地位を国民総生産、農家経済、都市家計、食生活、一般物価などと関連させて解明し、最後に米の需給現況を概括した。引き続き第2章では、米穀政策の変遷過程を、植民地体制期、絶対的不足期、生産急増期、自給達成期、供給過剰期に分け、各時期の特徴を当時の社会経済環境と関わらせながら明らかにした上で、米穀など主要穀物を対象とした現行の糧穀管理制度の仕組みを解明している。韓国における米穀政策は、日本の食糧管理法に相当する「糧穀管理法」が1950年に制定・公布されたのち現在に至るまで、政府による部分統制、すなわち一部自由取引、一部政府統制という二元的体系になっているが、その後の需給事情等の変化の中で幾度か修正され、今日に至っている。

第3章では、上記の米穀政策の変遷過程の特徴と関連させつつ、米流通構造の変化を、韓国における流通の主体である商人、農協、政府の各組織における流通対応に焦点を当てながら解明している。とくに韓国の米流通の主流になっている商人米の場合、産地段階においてもっとも重要な役割を果たしているのは搗精業者である。彼らは近年、從来

の搗精機能に加えて、米穀の販売、斡旋、金融、保管など他の商業機能をも担当するようになってきているが、これは政府による米穀買入量の増大に伴って、搗精業としての経営を維持できるだけの穀の量確保が難しくなってきているからである。

第4章では、現段階における流通構造の実態と問題点を、産地市場、卸売市場、小売市場の流通段階別の事例分析を通じて明らかにした。産地市場の段階については、米の主産地である京畿地方と湖南地方の実態を、卸売市場の段階については、韓国唯一の法定糧穀卸売市場である良才洞糧穀卸売市場の実態を、さらに小売市場段階では米小売商と大手スーパー・マーケットとの競争の実態を調査分析した。近年における米流通構造の変化において注目すべき点は、産地市場及び消費地市場の双方において農協米のシェアが高まっていること、および産地市場において従前大きな役割を果たしてきた委託搗精工場の規模が一般に零細で、農協精米工場との競争の中で厳しい環境にあることである。また糧穀卸売市場では、指定卸売人の集荷機能、仲買人および売買参加人の分散機能が発揮されていないなど、大きな問題を抱えているにもかかわらず、そこでの形成価格が産地および消費地における価格形成に少なからぬ影響を与えていた事実を明らかにした。

第5章では、韓国における米穀政策の当面する課題として、①近年、減少率が高まりつつある稻作付面積の維持・拡大方策の樹立、②政府買入期間の延長と時期別買入価格差の導入、および政府放出価格における季節変動幅の導入、③糧穀卸売市場における現物セリ取引の廃止と予約取引または見本取引の導入、④合理的な等級設定・規格化と精米表示制度の導入、⑤糧穀管理基金制度の充実、の5点を挙げそれぞれの理由を述べた。

終章では、これまでの各章の分析の要約を行い、さらに現段階の韓国における米穀政策と流通構造の問題点と課題をあらためて整理している。

このように本論文は、植民地時代以降今日に至る韓国の米穀政策の変遷過程を豊富な資料に基づいて記述し、さらに米流通構造の変化を、商人、農協、政府の流通組織別、および産地市場段階、卸売市場段階、小売段階の流通段階別に詳細に明らかにし、これらの新知見をベースに同国における米穀政策の課題を提示した点で、学術上大きな評価が与えられるだけでなく、転換期にある韓国の米穀政策に対しても貴重な提言となっている。

よって、審査員一同は、別に行った学力確認試験の結果と合わせて、本論文の提出者宋春浩は博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格があるものと認定した。